

「つまづきからの出発－中国農村調査をはじめた頃－」

木下英司（早稲田大学）

ぼくが、上海郊外の青浦県の農村で調査を始めたのが、1988年だから今年で6年目になる。今から思えば、随分いろいろなことを学んだような気がする。それらすべてを記しておきたい誘惑にかられるが、紙幅の関係上それは無理なので、はじめての中国調査のときの状況を記すことにとどめよう。

当時、ぼくはかなり悩んでいた。中国現代思想を主に研究していたのだが、思想と現実とが中国においていかに結びつくのかが分からなくなっていたからである。と同時にこの両者を結びつけるために、現地を見る必要を痛感し始めていた。そんな折り、知人のN氏から、上海での調査に参加しないかと誘われたのである。聞くところによれば、上海社会科学院に知り合いがおり、うまく手筈を整えてくれるという。悩んでいた時であったし、上海社会科学院が仲介してくれるなら問題はなかろうと思い、すぐに承諾した。しかし、現実には甘くなかった。なんと最初つまづきは、この社会科学院だったのだ。

社会科学院が承諾したまではよかったが、調査をするには「研究管理費」なるものを納めてほしいと要求してきた。要求額は日本円で一人約6万円。当時まだ院生であったぼくにとっては大金であり、調査をぎりぎりの経費で行おうと思っていた矢先、先制パンチを食らわされた様な気がした。大ゲンカの末、若干値切ったものの、ほとんど科学院の要求どおりの金額を払うことになってしまった。正直いって、かなり気分がわるく、農村まで同行してくれた社会科学院の研究者との関係までギクシャクしてしまった。

しかし、事態はこれで終わらなかった。農村でもイチャモンがついたのだ。郷政府の責任者たちのわれわれを見る目はかなり懐疑的であった。そして、なんと「二、三日で調査を終えることはできないか」ときりだしてきたのだ。冗談ではない、馬鹿も休み休みいえ。そう思った。後で分かったことだが、科学院の連絡不十分と、「調査」＝「取り調べ」という印象があまりにも強すぎたのだ。今になってみれば、笑い話で済まされるが、当時はとてもそんな余裕はなかった。頭に血がのぼり、加えて35度の気温が拍車をかけ、爆発寸前となったが、おさえにおさえ、訳を話して二週間前後の調査をようやくできるようにした。農民たちも当初われわれを警戒していた。初日に行った農家では、明かに緊張していることが分かった。もっとも、こうした緊張はものの十分も持続しなかった。聞く内容が「取り調べ」などというものではなく、ごく当たり前のことだったからである。これも後で分かったことである。それでも二日くらいは、まだまだ農民との間には緊張が漂っていた。三日目にはいると完全に緊張は消えていた。

かくして35度の炎天下における調査は終わった。調査が終了した時点で、農民の態度は勿論、郷政府の関係者、社会科学院の先生方の態度も変わっていた。このとき初めて、ぼくは今後もっと詳しい調査ができると確信した。それは同時に100%ではないにしても、少しは信用されたという嬉しさでもあった。

以上が、はじめて中国農村の調査をした頃の始末である。今やこの農村も浦東開発に飲み込まれて大きく変化し、ぼくもまた山東省の農村調査も手がけたり、思想研究をやったりと、その守備範囲を広げている。中国研究をここまでやってこられたのも、この上海調査が大きな支えとなっているように思う。そういう意味からすれば、この調査は、ぼくにとって恩人といえるであろう。